幼年教育研究年報　第20巻
The Annual Research on Early Childhood, 1998, **20**, 19 − 25

適応プロセスを通してみる幼児の相互作用の変遷

謝　文慧[1]

The Changes in Preschoolers' Interactions through Transition Processes

Hsieh Wen-huei[1]

The social interactions of newly enrolled preschool children were observed and scored for the frequencies of verbal, physical and nonverbal behaviors. Furthermore, based on whether the behavior is pro-social or positive respondence, each kind of interaction pattern was categorized into positive, neutral or negative behavior. Based on a sample of nineteen three-year-old preschoolers, findings indicated that the increasing physical interaction can be a measure as predicting the period when changes occurred in preschoolers' interpersonal relations. Results also suggested that those interactions toward teacher or among children would be quite different during the first two months. For preschoolers, teacher played quite important role as an interpersonal anchor-point, especially during the first week.

Key words: interpersonal anchor-point, interpersonal relations, negative, neutral, nonverbal interaction patterns, physical interaction patterns, positive, transition processes, verbal interaction patterns

なぜ子どもを保育園または幼稚園に入れたかについて，親は主な理由として仕事に出かけるためであるとする回答が多い。しかしながら，保育園，幼稚園に入れられる子どもの数が増加しつつある大きな理由の一つは，早期の集団経験が後の学校生活の成功に重要で，必要なものだと親が考えているからであろう(Howes, 1988b)。早い時期から介入的プログラムを導入した保育園に通った幼児は，統制群よりも，その後全般的により望ましい学校生活を送られた，という結果が得られた研究(Lazar, Darlington, Murrar, Royce, & Snipper, 1982; McCartney, Scarr, Phillips, & Grajek, 1985)もあれば，介入的ではない(nonintervention-based)保育園に通った幼児は，保育園に通っていない幼児に比べて，後の学校生活のなかで，攻撃的，非服従的，独断的な行動を多くした，という結論を出した研究(Rubenstein, Howes, & Boyle, 1981; Vlietstra, 1981)もある。なぜこのような逆の結論が得られたかについて，Haskins(1985)は，長期間にわたる早期の集団経験がプログラムの内容に影響され，とりわけ，コミュニケーションに基づくプログラムよりも，認知指向のプログラムを取り組んだ保育園に通わせた幼児のほうが，小学校でより多くのネガティブな社会的行動を起こした，と指摘した。

このように，幼稚（保育）園児の適応プロセスに関して，今までの研究では，保育プログラムの内容，幼児が入園当初の年齢，保育者の履歴，保育者が担当するグループのサイズ，割り付けられた行動スペースの大きさなどを取り上げて，幼児のその後の学校生活での適応状況との関連を検討するものがほとんどであった。つまり，外的環境を構成する諸要素がいかに幼児のその後の行動パターンに影響を及ぼすかは教育的介入の注目点の一つであった。一方，環境移行の主体である幼児の状況に着目し，適応プロセスに焦点をあてた研究では，友だち関係，仲間受容度など個人が集団内でどこに位置づけをしているかをみることによって，その後の適応状況を予測する，という手法はよく扱われている(Ladd & Kochenderfer, 1995)。しかしながら，環境移行初期にみられた仲間による

1　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

高い受容度，または拒否度は，個人のその後の適応程度を予測できる(Ladd & Price, 1987; Howes, 1983, 1988; Ladd, 1990)にもかかわらず，時期をより制限して，社会的評判がまだ成り立っていない移行の最初期における個人の行動パターンがその後の仲間関係もしくは適応状況に対してどのような影響を及ぼすかについて，いまだに明らかにされていない。お互いに相手のことを知らない状況で新しい環境に入るという移行事態において，誰もが経験する発達的諸様相，つまり，いつ，何がどのように変化するかについて，まだ不明な点が多く残されている。子どもの仲間グループでの評判は仲間との相互作用，または仲間活動への参加方法を影響する(Coie, 1990; Ladd & Kochenderfer, 1995)，また，たとえ子どもが社会的評判を決定する行動パターンを変えたとしても，周囲からの世評はなかなか変化しない(Dodge, 1980)。従って，世評が固く形成される前に，個人の適応状況というよりもその集団へ溶け込むために皆が経なくてはならない適応過程とは何かをまず明らかにする必要がある。さらに，個人の適応状況を判断するためにも，まず各集団特有の適応状況に基づく測定基準がなければ知る余地もない。幼児が移行後新しい環境にどのくらい慣れているか，他の子に比べてどうであるかに関して，従来，保育者が個人の経験に基づき判断を下す場合が多い。幼児の適応状況を測定する客観的な指標は現在のところまだ作成されていない。ここでいう適応状況とは，母集団の発達水準や特有文化などを基準にして，それにどの程度当てはまって馴染んでいるかを指す。幼児の行動を縦断的に観察し，その行動パターンから適応の度合いに関する指標を見出す。その指標に基づいて，それぞれの幼児の適応状況を明らかにすることが可能となり，重要だと思われる。

新入幼稚園児が保育者を１つの対人的アンカ・ポイントとしながら，子ども間の対人関係の範囲を徐々に拡大していく(謝, 1997)。また，入園当初における保育者の参与・誘導が新入幼稚園児のグループ遊びの発生や構造性レベルに大きく影響している(謝, 1996)ことから，交渉相手が保育者であるか幼児同士であるかは，新入幼稚園児の相互作用の内容に大きく関わると考えられる。そこで，適応プロセスを通して幼児の相互作用の変遷を究明するために，立場も役割も随分異なる保育者と友だちを区別して比較する必要があると思われる。

従来，仲間での社会的地位と行動パターンとの関連について関心を寄せた研究は，たとえお互いのことをよく知らない集団を用いたとしても，実験室内，いわゆる人工的な環境のなかで，社会的相互作用を引き出すために何らかの課題もしくは限定した遊びに直面させることによって，子どもが行った行動反応と，その後個別面接で得られた社会的地位とを比較してきた(e.g., Dodge, 1983)。しかしこのような手法は，開始と経過時期が固定している幼稚園に入園するという事態には不自然で適用できないし，独り遊び，グループ遊びなど包含性の広いカテゴリーを用いて幼児の行動パターンを測ると，相互作用の細かな変化を見落とす危険性も考えられる。そこで，本研究は幼児の相互作用をすべて記録，分類できるように，言語的・身体的・非言語的の３つの行動パターンを設けた。また，子どもの行動に対する仲間の反応は社会的地位と関連する(e.g., Putallaz & Gottman, 1981)ので，その後の関係性との影響を考え，それぞれの行動パターンをさらにポジティブ・ニュートラル・ネガティブにコード化した。

以上の問題点を含めて，本研究は，発達の視点から環境移行後，幼児の相互作用パターンおよびその性質が，時期の経過とともにどのように変化していくかを対象別（保育者または幼児同士）でみることによって，幼児の適応に影響を及ぼす要因がいつ，どのように現れ，変化していくかを明らかにすることを目的とした。

方法

対象児：観察対象となったのは東広島市のＦ幼稚園に新しく入園した３歳児19名であった。

観察日時および場所：観察は新しい学期が始めて翌日の4月12日より２か月間，4月12, 13, 14, 17,18, 20, 24, 25, 27日，5月9, 10, 11, 16, 17, 23, 25, 26, 30日，6月1, 2, 6, 7, 8, 13,14日の計25回，朝9時半から10時半の自由遊びの間に行った。5月の１週間目（入園してから４週間目にあたる）は休園のため観察できなかった。観察を行った場所は3歳児保育室であった。

観察方法：観察者による自由遊び場面のビデオ録画，及び状況の補助的記述の自然観察を行った。一回にあたり30分間ビデオ撮影を行った。

観察内容：観察者が録画ビデオを見て，子どもが相互作用を行う際に使用した行動パターンを記録し，それをもとにコード化した。コード化したデータを一日単位でカウントし，そして一週間毎にまとめて平均頻度を算出した。

相互作用場面の行動パターンと内容：相互作用場面における行動パターンのカテゴリーの項目は，

Table 1　相互作用場面における行動パターンのカテゴリー

行動パターン	内容
言語的相互作用	**言語的相互作用が行われる場合**
ポジティブな言語的対応	慰める・褒める・指示・提案・誘い・応答・意見の伝達
ネガティブな言語的対応	責める・命令・叱る・批判・拒否・注意・反発・脅かす 喧嘩・叫ぶ・言いつける
ニュートラルな言語的対応	質問・要求・陳述・挨拶
身体的相互作用	**他者との直接的な身体接触またはものを媒介した間接接触**
ポジティブな身体的対応	身体的な誘い・手伝う・ものの交換か分与・手をつなぐ
ネガティブな身体的対応	ものの奪い合い・独占行動・親友同士のふざけ・暴力をふるう
ニュートラルな身体的対応	ものの伝達
非言語的相互作用	**身体的な接触がなく，物理的距離を保ちながら顔の表情や身振りで対応する**
ポジティブな非言語的対応	うなずく・譲る・微笑む・服従
ネガティブな非言語的対応	拒否意志を示すために手か頭を振る・泣く・無応答・顔をしかめる
ニュートラルな非言語的対応	模倣・傍観する・中立行動・黙って受け入れる

Dodge(1983), Putallaz & Gottman(1981), 田(1987)と謝(1995)の分類を参考にして作成したものである(Table 1参照)。言葉を通しての交渉が行われる場合，その行動を言語的相互作用とし，言葉を伴わず他者との直接的な身体接触またはものを媒介した間接接触が行われる場合，その行動を身体的相互作用とし，言語的，身体的な交渉がなく，物理的距離を保ちながら顔の表情や身振りで対応する場合，その行動を非言語的相互作用に分類した。さらに，どちらの行動パターンにおいても相互作用の内容が，相手の気持ちを考慮に入れたかどうかと，その後の関係性に正または負の影響をもたらすかによって，それぞれポジティブ，ニュートラル，ネガティブな対応に分類した。

結果

言語的，身体的，非言語的パターン

それぞれのカテゴリー得点についての結果を以下に記述した。まず，相互作用パターンを８週間を通してパターン別で比較してみると，最初の２週間は言語的相互作用が身体的，非言語的相互作用よりも著しく多かった。3週間目から，身体的相互作用が言語的相互作用とほぼ同程度まで増加してきたが，非言語的相互作用は８週間目まで依然として言語的相互作用の半分しかみられなかった（Figure 1参照）。相互作用全体のなかで，言語的行動パターンは８週間を通していつでも最も多く行われた。他者との直接的な身体接触またはものを媒介した間接的な接触といった身体的相互作用は最初の２週間では全体の相互作用の４分の１であったが，３週間以後全体の５分の２まで増加した。以上の２種類の相互作用に比べて，非言語的相互作用は少ない頻度を示した。

ポジティブ，ネガティブ，ニュートラルな対応

相互作用を性質から比較したところ，最も多くみられたのはニュートラルな相互作用であり，その次に多かったのはポジティブな相互作用であり，一番少なかったのはネガティブな相互作用であった。

さらに，各相互作用パターンの性質について比較を行った。言語的パターンにおいて最も多く現れたのはニュートラルな相互作用であり，そしてポジティブ，ネガティブな順であったが，最初の2週間にはほぼみられなかったネガティブな言語的相互作用は3週間目から増えたため，ポジティブな相互作用との差が小さくなった。活動内容についての質問や陳述，説明などといったニュートラルな言語的対応が

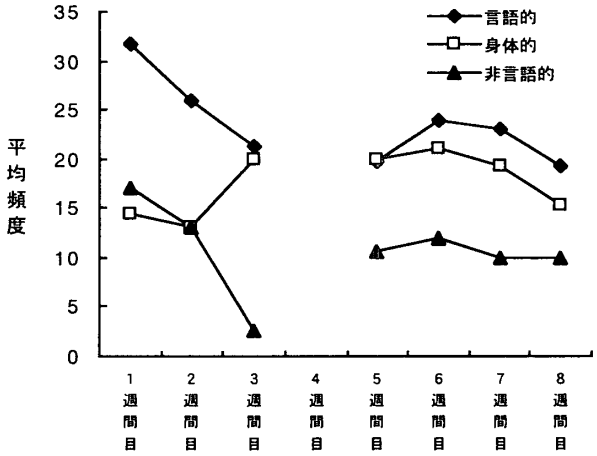

Figure 1　言語的･身体的･非言語的相互作用

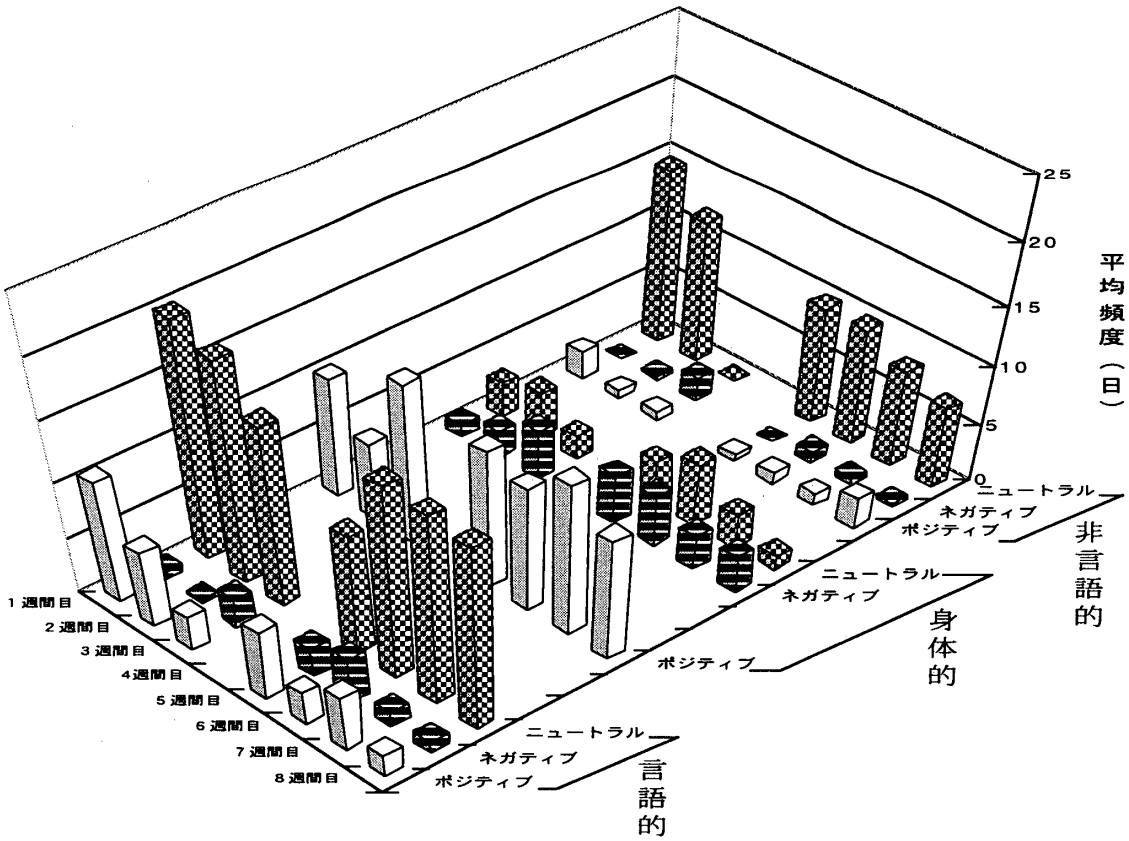

Figure 2　相互作用のパターンと性質の平均頻度

相互作用パターン全体のなかで高い割合を示していたことが分かった。3週間目以後，相手のことを拒否したり，喧嘩を起こしたりした行動が現れたため，ネガティブな言語的相互作用の生起率が高くなってきた。身体的パターンに関して，8週間を通してみると，どの週においてもポジティブな相互作用はネガティブ，ニュートラルな相互作用よりも2倍ほど多くみられた。ものの交換か分与，身体的な誘いなどといったポジティブな身体的相互作用が目立った。非言語的パターンについて，3週間目を除いてニュートラルな相互作用が顕著にポジティブ，ネガティブな相互作用よりも多くみられた（Figure 2参照）。各行動パターン，相互作用の性質について8週間を通して全体で生起頻度を比較すると，ニュートラルな言語的相互作用が最も多く，そしてポジティブな身体的相互作用，ニュートラルな非言語的相互作用の順であった(Figure 2参照)。

相互作用の対象—保育者 vs. 幼児同士

相互作用の対象が保育者であるか，幼児であるかで相互作用の生起率について比較を行った。保育者を対象とした相互作用の生起頻度と幼児間の相互作用の生起頻度をあわせて比率にして比較すると，保育者との生起率対幼児間の生起率は，1週間目において7対3であり，2週間目以後おおよそ5対5の割合を保っていた(Figure 3参照)。

8週間を通して相互作用の性質について相互作用の対象別で比較を行った。保育者を対象とした相互作用に関して，8週間のどの週においても，ポジティブとニュートラルな相互作用は平均生起頻度数がほぼ同じであった。ネガティブな相互作用はほとんどみられなかった (Figure 4参照)。それに対して，幼児間の相互作用に関して，8週間を通して全般的に比較すると，最も多くみられたのはニュートラルな相互作用で，ポジティブとネガティブな相互作用との間にははっきりとした差はみられなかった。(Figure 4参

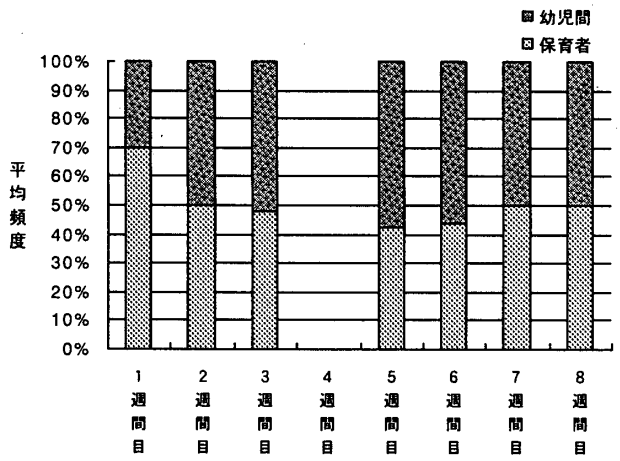

Figure 3　保育者･幼児を対象とした相互作用の割合

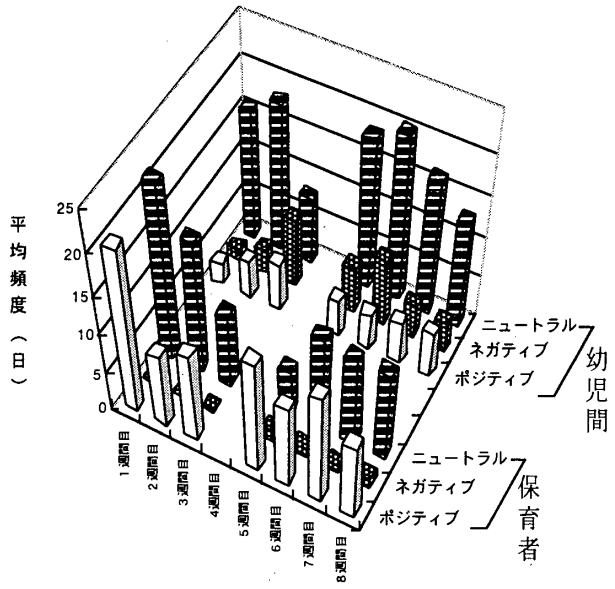

Figure 4　保育者･幼児を対象とした相互作用

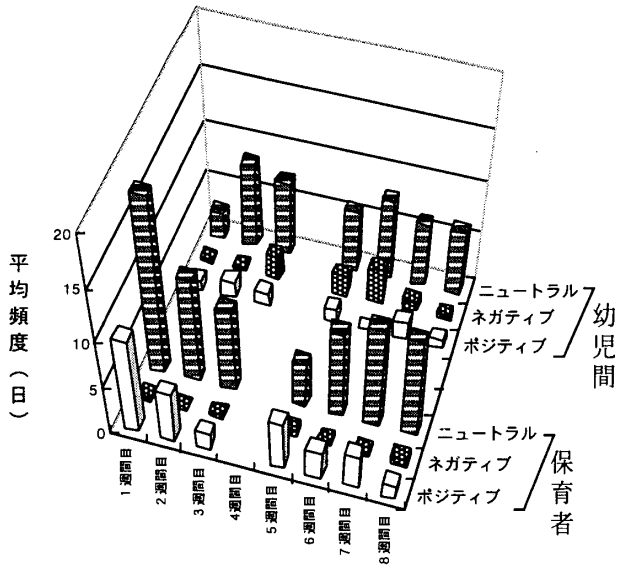

Figure 5　保育者･幼児を対象とした言語的相互作用

照)。

それぞれの相互作用パターンについて更なる検討を行った。まず，言語的相互作用について，保育者を対象とした場合，８週間を通して最も多くみられたのはものを頼む，遊びの内容についての陳述，のようなニュートラルな相互作用であった。次に多かったのはポジティブな言語的相互作用であったが，時間が経つにつれて全体として減る傾向がみられた。ネガティブな言語的相互作用はどの週においてもほぼみられなかった。他方，言語的相互作用の対象が幼児である場合では，最も多かったのは，対保育者の場合と同様に，質問，陳述といったニュートラルな相互作用であった。しかしながら，相互作用の対象が保育者であった際にほとんど見当たらなかった，相互作用の相手に対して拒否したり，反発したり，叫んだりといったネガティブな言語的相互作用は，幼児間においてはポジティブな相互作用と変わらないほど多くみられたし，時にポジティブな相互作用を上回った場合もあった(Figure 5 参照)。

身体的相互作用について，保育者を対象とした場合，生起頻度が高い順で並べると，ポジティブな相互作用が最も多く，そしてニュートラルであって，ネガティブな相互作用はほとんどなかった。保育者に抱っこしてもらったり，自分が作ったものを保育者に見せたり一緒に共有したりといったポジティブな身体的相互作用は８週間を通して多く行われた。これに対して，相互作用が幼児間で行われた場合，８週間を通してみると，ニュートラルな相互作用よりも，ネガティブとポジティブな相互作用が少し多く，ほぼ同頻度で行われた。幼児間におけるものの交換か分与といったポジティブな身体的相互作用は，保育者との間で行われた生起頻度に比べて，半分しかなかったものの，８週間のどの週においても安定とした生起率が示された。保育者を対象とした場合に比べて，ネガティブな言語的相互作用と同様に，幼児間のネガティブな身体的相互作用が多くみられた。ものの奪い合い，独占行動などのようなネガティブな身体的相互作用が幼児間にはよくみられ，暴力までふるったケースも少なくなかった。全体からみて，最も目立ったのは，保育者を対象としたポジティブな身体的相互作用が8週間を通して高い生起頻度を示したことであった (Figure 6 参照)。

非言語的相互作用について，保育者を対象としたポジティブ，ニュートラルとネガティブのいずれの性質においても非常に低い平均頻度が示された。幼

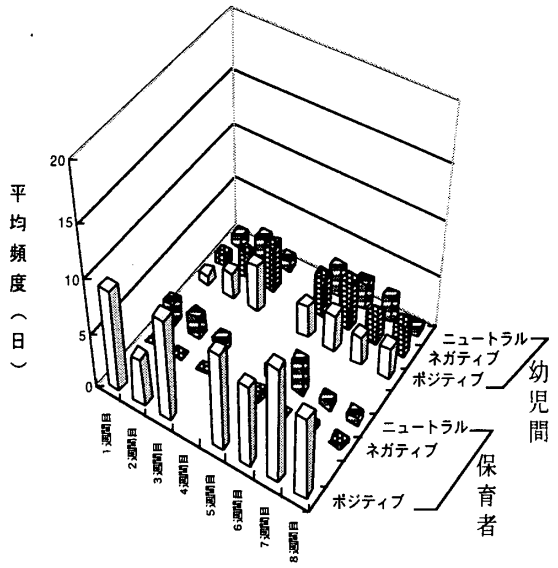

Figure 6　保育者･幼児を対象とした身体的相互作用

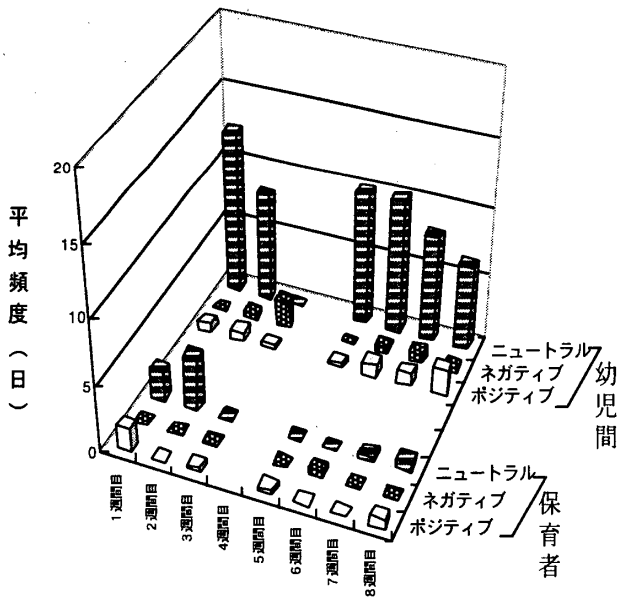

Figure 7 保育者･幼児を対象とした非言語的相互作用

児間の非言語的相互作用においては，ニュートラルな相互作用が最も多く示され，また，ポジティブな相互作用に関して，時期が経つにつれて，ほんの少しでありながら増加する傾向がみられた。ネガティブな相互作用は非常に少なかった(Figure 7参照)。他者の行動を傍観したり，模倣したりするといったニュートラルな非言語的相互作用が幼児の間では８週間のいずれの週(３週間目を除く)においても多くみられた。

総合考察

環境移行後，自由遊び場面における幼児の相互作用パターンが時期の経過とともに，どのように変化していくかに関して，言語的，身体的，非言語的パターンのそれぞれの生起頻度について比較を行った。８週間を通して，生起頻度が最も高く，かつその変化が安定としていたのは言語的パターンであった。相互作用の中で言葉を通しての交渉が最も頻繁に用いられたことがわかった。次に多かったのは，もともとの生起頻度が相互作用全体の４分の１しか占めなかったが，３週間目から相互作用全体の５分の２まで増加してきた身体的相互作用であった。ある程度の親密性があって，自己主導による他者との直接的な身体接触またはものを媒介した間接的な接触（本研究では身体的相互作用とカテゴリーした）は起こると考えられるので，幼児の適応プロセスにおいて対人関係にいつ変化が起きるのかを測るために，自由遊びにおける身体的相互作用の生起頻度は指標の一つとなる。

各相互作用パターンについて対応性質から検討を行った。８週間を通して全体的な生起頻度が高かったのはニュートラルな言語的相互作用，ポジティブな身体的相互作用とニュートラルな非言語的相互作用であった。しかしながら，時期による変化はどの相互作用パターンにおいてもみられなかった。それは，環境移行という事態を発達的視点から検討する際，移行してからの２ヶ月間は新入幼稚園児の相互作用における変遷を究明するのに短すぎたからと考えられる。従って，新入幼稚園児の相互作用パターンおよびその性質がいつ，どのように変化していくかについて，より長い期間で綿密に検討することは今後の課題の一つとして残されている。

本研究においての相互作用の対象についての検討は，新入幼稚園児の適応プロセスにおける対人的アンカーポイントが移行後どのように変化していくかを知るための方法としてみなされる。保育者を対象とした相互作用の生起頻度が，１週間目は全体の相互作用の７割を占めていて，２週間目に入ってからも常に５割を保っていたことから，新入幼稚園児にとって保育者は重要な対人的アンカー・ポイントであることがわかった。保育者のその役割が１週間目において特に顕著であった。

幼稚園に入園してからの２ヶ月間，幼児の各相互作用パターンについて性質ごとに比較を行った結果，新入幼稚園児の自由遊び場面での行動パターンに大きく影響するのは，相互作用の対象であったことが示された。保育者を対象とした場合，言語的，身体的，非言語的パターンのどちらにおいても，ネガティブな相互作用がほとんどみられなかった。それに対して，幼児間の相互作用の場合では，ネガティブな言語的，身体的相互作用の平均頻度はポジティブな言語的，身体的相互作用とほとんど変わらず，時に多かった場合もあった。保育者と子どもとの間ではそもそも明らかな勢力関係があり，かつ保育者が子どもと争うことも考えられないので，ネガティブな相互作用がみられなかったことは当然であると考えられる。しかしながら，もし子どもが幼稚園生活にスムーズに適応できず，頻繁に保育者に泣きついてきたりすることが多かったら，少なくとも泣くといったネガティブな非言語的相互作用は，子どもと保育者との間に多くみられたと思われる。本研究で保育者を対象とした相互作用の中でネガティブな相互作用がほとんどみられなかったのは，観察対象となった19名の新入幼稚園児が皆深刻な不適応行動を起こしていなかったからと言えるのではないか。

引用文献

Dodge, K. A. 1980 Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, **51**, 162-170.

Haskins, R. 1985 Public school aggression among children with varying day-care experienc. *Child Development*, **56**, 689-703.

Howes, C. 1983 Patterns of friendship. *Child Development*, **54**, 1041-1053.

Howes, C. 1988 Peer interaction of young children. *Monographs of the society for research in child development*, **53**, (1, Serial No. 217).

謝　文慧 1995 幼児の遊びにおける交渉ストラテジー—勢力関係と遊びの維持との関連—　幼年教育研究年報, **17**, 91-98.

謝　文慧 1996 適応プロセスを通してみる空間的アレンジメントと子どもの行動パターンとの関連 広島大学教育学部紀要第1部, **45**, 201-209.

謝　文慧 1997 入園前の集団経験が幼児の適応過程に及ぼす影響　広島大学教育学部紀要第1部, **46**, 125-132.

Ladd, G. W. & Price, J. M. 1987 Predicting children's social and school adjustment following the transition from preschool to kindergarten. *Child Development*, **58**, 1168-1189.

Ladd, G. W. 1990 Having friends, keeping friends, making friends, and being liked by peers in the classroom: Predictors of children's early school adjustment? *Child Development*, **61**, 1081-1100.

Ladd, G. W. & Kochenderfer, B. J. 1995 Linkages between friendship and adjustment during early school transition. In W. M. Bukowski & A. F. Newcomb & W. W. Hartup(Eds.), *The company they keep: friendship in childhood and adolescence*. 322-345. New York: Cambridge University Press.

Lazar, I., Darlington, R., Murrar, J., Royce, J., & Snipper, A. 1982 Lasting effects of early education. *Monographs of the society for research in child development*, **47**, (1-2, Serial No. 194).

McCartney, K., Scarr, S., Phillips, D., & Grajek,S. 1985 Day care as intervention: comparison of varying quality programs. *Journal of applied developmental psychology*, **6**, 247-260.

Putallaz, M., & Gottman, J. M. 1981 Social skills and group acceptance. In S. R. Asher & J. M. Gottman(Eds.), *The development of children's friendships: description and intervention*. New York: Cambridge University Press.

Rubenstein, J., Howes, C., & Boyle, P. 1981 A two-year follow-up of infants in community-based day care. *Journal of child psychology and psychiatry*, **22**, 209-218.

田　育芬 1987 幼稚園での空間的アレンジメントと幼児の社会的相互作用との関連　国立台湾師範大学家政教育研究所修士論文

Vliestra, A. G. 1981 Full-versus half-day preschool attendance: effects in young children as assessed by teacher ratings and behavioral observations. *Child Development*, **52**, 603-610.

謝辞

本研究の実施にあたってご協力いただきました広島大学附属幼稚園の園児の皆さん，先生方に記して心より感謝申し上げます。また，論文作成にあたり終始多大なるご指導をいただきました山崎晃教授に心より感謝申し上げます。